

翼階に置いて、時々読みたてまつる。神護景雲三年歳の己酉に次るとしの夏五月の二十三日丁酉の午時に火を発し、惣家みなことごとく焼け滅す。ただし彼の経を納めたる筈のみ、盛なる燭火の中に有りて、かつて焼き損ふ所無し。筈を開きて見たてまつれば、経の色儼然しくして、文字宛然なり。八方の人視聞きて、奇異びずといふこと無し。諒に知る、河東の練行の尼の写せる如法経の功茲に顕る、陳時に王与女の読める経の火の難を免れたる力再示ると。賛に曰はく「貴きかな、榎木氏、深く信ひ功を積みて一乘経を写す。護法の神衛りて、火は靈しき験を呈す」といふ。是れ不信の人の心を改むる能き談にして、邪見の人の悪を轍むる頼たる師なり。

二の目盲ひたる女人薬師仏の木の像を帰敬ひて現に眼を明くること得る縁 第十一

諸業京越田池の南蓼原里の中の蓼原堂に薬師如来の木像在す。帝姬阿倍天皇の代に当りて、其の村に二の目盲ひたる女有り。此一の女子を生み、年七歳なり。寡にして夫無く極めて窮しきこと比無し。食を索むること得ず、将

に飢えて死なむとして、自づから謂はく「宿業の招ふ所なり。ただし現報のみにあらず。徒に空しく飢えて死なむよりは、善を行はむに如かず」とおもひて、手に手を控かしめて其の堂に送り、薬師仏の像に向ひ眼を願ひて曰さく「我が命を惜むにあらず。我が子の命を惜む。一は是れ二人の命なり。願はくは我れに眼を賜へ」とまうす。檀越見矜みて戸を開き裏に入れ、像の面に向ひて称へ礼ましむ。二日を逐て副ひたる子見れば、其の像の臆より桃の脂の如き物忽然に出でて垂る。子母に告知らす。母聞きて食はむと欲ひ、故に子に告げて曰はく「搏りて吾が口に含めよ」といふ。然うして食へば、はなはだ甜し。すなはちまた目開く。定めて知る、心を至して願を發す、願はば得ずといふこと無し。是れ奇異しき事なり。

二の目盲ひたる男敬ひて千手観音の日摩尼の手を称へて現に眼を明くること得る縁 第十二

奈良京薬師寺の東の辺の里に、盲ひたる人有り。二の眼精盲ひたり。観音を帰敬ひ、日摩尼の手を称念へて眼の闇きを明けむとす。昼は薬師寺に正東の

一 未詳。
 二 晨朝、日中、などという定まつた時に。
 三 七六九年。五月二十三日は庚寅にあたる。丁酉は五月三十日。五月二十三日が丁酉となるのは宝亀四年(七三三)。午時は、午前十一時から午後一時のころ。
 四 整つた姿であること。法苑珠林・敬法篇・感心縁所引冥祥記に、周圓の経が灰燼の下に儼然如故であった、とする。法苑珠林・敬法篇・感心縁に、狐元軌の如法潔淨にして書写した経が火事に遭うも焼けずに宛然如故であった、とする。
 五 河東の練行の尼の書写した法華経は、龍門の僧法端の目には文字をあらわさなかつた冥報記(上)。この説話は語書に収録されているが、いづれも「如法」(如法経)という表現を含まない。法華経書写に關して、如法経が説かれる例に、集神州三宝感通録・下・敬恭の条がある。
 七 未詳。

第十一縁 今昔物語集・十二ノ十九に書承。

八 平城京の東南隅、左京九条あたり所に所在したか。五徳池はその一部分の跡地か。
 九 所在不明。
 一〇 未詳。
 一一 いかなる宿業か、という具体相は述べられない。
 一二 いたずらにむなしく飢えて死ぬことは、善行をおこなうことに及ばない。「徒空飢死」と「行善」とを比較し、「行善」をえらぶ。
 一三 食や銭でなく眼を願っている。薬師如来本願経の第六大願、願我來世得菩提時、若有衆生、其身下劣、諸根不具、醜陋頑愚、聾盲

跛躄、身癯背偻、白癩癩狂、若復有餘種種身病、聞我名已、一切皆得菩提具足身分成滿云、(第七大願、願我來世得菩提時、若有衆生、諸患逼切、無護無依、無有住処、遠離一切資生医薬、又無親屬、貧窮可愍、此人若得聞我名号、衆患悉除、無諸痛惱、乃至究竟無上菩提)という願にかかわる説話とする松浦貞俊の指摘がある。
 一四 私の一つの命は、私と娘との二人の命である。
 一五 底本訓釈「搏取也」。

第十二縁 今昔物語集・十六ノ二十三に書承。
 一 千手観音の手のひとつ。日精摩尼(日精)太陽を象徴した宝珠を持つ。「日精摩尼」と称されることが多い。「若為眼闇無光明」者、当於日精摩尼手(千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經)。「日摩尼手」若人欲眼開求光明者、可修日摩尼法(千光眼觀自在菩薩秘密法經)。「称」は陀羅尼を唱える意であろう。千手千眼觀世音菩薩大悲心陀羅尼經、千光眼觀自在菩薩秘密法經には、日精摩尼手(日摩尼手)に關して全く異なる陀羅尼を掲載している。

二 秋篠川のほとり。
 三 外見上は眼珠が正常で、視力が無いこと。
 四 薬師寺の千手観音は未詳。薬師寺縁起に又二体觀世音菩薩像(坐高)として孝徳天皇の皇后御願の一体と、後代の一体とを流記版によつて述べるが、孝徳天皇の皇后御願の一体がこれにあたるか。
 五 薬師寺の堂塔は南面して建てられていた。東門は奴婢門(薬師寺縁起)。原文「昼坐坐薬師寺於正東之門」。